

IIAS NEWS LETTER

1996年7月発行

国際高等研究所

編集・発行／国際高等研究所

〒619-02 京都府相楽郡木津町木津川台9-3

TEL: 0774-73-4001 FAX: 0774-73-4005

インターネットアドレス <http://www.iias.or.jp/home.html>

目次

研究集会報告

- ◎ 「『比較幸福学』の過去、現在、未来」
比較幸福学 実行委員会座長 中川 久定
- ◎ 「現代人の起源」
理論生命科学実行委員「遺伝と進化」担当 尾本 恵市

掲示板

- ◎ 招聘研究者の滞在
- ◎ インタネットホームページを開設
- ◎ 公開講演会参加者募集
- ◎ 今後の予定
- ◎ 出版物の紹介

研究集会報告

「比較幸福学」の過去、現在、未来

比較幸福学 実行委員会座長
近畿大学文芸学部教授
中川 久定

「比較幸福学」の研究プロジェクトが発足してから満5年になる。このプロジェクトについては、昨年6月24日の企画委員会で中間報告を行ったので、その講演内容に基づき、これまでの経過と現状および今後の展望についてまとめてみたい。

「比較幸福学」プロジェクトは、91年に「幸福の条件」というテーマで「幸福が歴史的に、世界のいくつかの文化圏の中でどのように考えられていたか」を研究するチームとして始まった。

まず、日本を出発点として、中国、インド、ギリシャとローマ、キリスト教圏、イスラム圏および世俗化されたヨーロッパ圏の計7つの文化圏を対象とし、日本人研究者のワークショップと国際シンポジウムとをそれぞれ開催した。

その前提として、次の4点の枠組みを設定した。

- ① 「幸福」がどういう言葉で表現され、幸福にまつわる言葉がどういう意味論的な場で使われているか。
- ② 「幸福」という観念が、一つの文化圏のなかで時間的、空間的にどのように変化したか。

③ 人々は、どういう内面的体験のときに「幸福」を実感するか。

④ 「幸福」は自分中心的か、あるいは神のような超越的なものとの関連で考えられているか。

日本人研究者のワークショップでの成果は、「無限大93」(IBM刊)の特集「幸福の条件」としてまとめられた。しかし、国際シンポジウムの成果は、オックスフォード大学出版局と相談の結果、出版物を断念せざるをえなかった。

「幸福の条件」の段階では、歴史的な展望のなかだけで幸福を考えていた。しかし、高等研の基本理念が「人類の未来と幸福」にあるところから、過去に注目するだけでなく、現在の「幸福」の問題へと重点を移してきている。

また、「比較」という立場をより鮮明にするようになった。というのも、自然科学では遺伝子のように「もの」があって、世界中どこでも共通に理解できる法則のようなものがある。しかし、人文科学の領域では共通の対象としての「もの」は存在しない。「幸福」を例

にとっても、文化圏によって表す言葉が違い、見方も異なる。言語も伝統もまったく違う文化圏の「もの・こと」をどれだけ理解できるかが、人文科学の場合には特に問題になってくる。

この理解を助けるのが「比較」という立場である。外国の文化を理解するためにどっぷりとその文化につかかってしまうと、その文化の本質が見えなくなってしまうことがある。「比較」というのは二つのものを単純に比べるだけではない。例えば、フランスについて発言する場合、発言者が自分の伝統、自分の立っている場所を自覚して、フランスと日本とを超えた第三の立場を自らのうちに設定し、そこからフランスを見ることだ。言い換えれば、海外で暮らすことで日本を対象化し、よりよくわかるようになるという人がいるが、これと同じことだ。

異文化への発言は自らの文化への言及と反省を暗黙のうちに含まざるを得ず、文化的背景の違いをも考慮に入れざるを得ない。このような視点から、「幸福学」を考えるうえにも「比較」の立場が重要なのである。

ところで、「幸福学」、「比較幸福学」という学問は、日本にも欧米にも、まだ存在していない。自分はこれまで、18世紀のフランス文学・思想における「幸福」の問題からこの新しい学問体系を建設しようと模索してきた。その前提となるヨーロッパにおける「幸福論」の流れをみてみよう。

まず、アリストテレスの「ニコマコス倫理学」(紀元前4世紀)では、「幸福」とは「ある種の活動(エネルギー)、すなわちそれ自体が現在の活動である」と規定され、「幸福」は遠い未来にいつか手に入る可能性のある事柄ではなく、今、現在の問題だとしている。また、ヨハネの「ヨハネによる福音書」(紀元1世紀)の

中でも、神の国はすでに到来しており、「幸福」を未来に求める必要はない、現在この瞬間にすでに救いのあるときがあり、「幸福」のときであると主張している。

しかし、その後のヨーロッパ哲学の主流はプラトン、カント、ショーペンハウアー、ニーチェ、ハイデッカー、サルトル、カミュへと続き、その系譜のなかで「人間というものはつねに幸福になれない存在、悲劇的な存在である」という点だけが強調されてきた。

一方で、アリストテレスやヨハネのように、「幸福を現在の問題としてとらえる」流れ(幸福の現在化)も脈々と続いており、現在ではソルボンヌ大学名誉教授のロベール・ミスライ(倫理学)が「主体の積極的な態度決定によって初めて幸福は可能になる」との考えに立ち、「幸福学」を建設しようとしている。

95年秋には、高等研にミスライ教授を招き、今後の研究のあり方を検討した。その結果、現代の「幸福」の問題を世界の数多くの文化圏にわたって扱うのは範囲が広すぎるとの結論に達し、ミスライ教授の提案である「ヨーロッパ、中国、日本」に焦点を絞って進めていくことになった。

また、95年度から、現在の日本人が「幸福」をどのようにとらえているかを知るために、アンケートのような統計学的手段によらず、日本の現代社会の各分野で活動している人たちから具体的な話を聞き、「現代人にとっての幸福とは何か」に関する指標を作ることはできないかと、具体的研究を始めている。

しかし、このプロジェクトは何らかの規範に立って、「これが正しい幸福感である」とか、「高等研推奨銘柄の幸福の理念である」などと押しつけるつもりはなく、「幸福」の問題をもっぱら学問的に比較・認識することだけを考えている。

研究リーダー略歴

中川 久定(なかがわ ひさやす)

専門 フランス文学 文学博士(京都大学)
日本学士院会員
1931年生れ。
京都大学文学部卒業。
同学大学院文学研究科博士課程中退。
1980年同大学文学部教授。
1981年パリ第7大学客員教授。
1985年-1986年パリ国立東洋言語文化研究所客員教授。
1992年京都大学文学部長。
1994年近畿大学教授および京都大学名誉教授。
1994年-1995年パリ高等師範学校客員教授。
主な著書 「自伝の文学」、「ディドロの『セネカ論』」、
「啓蒙の時代と比較の視点」(フランス語)

尾本 恵市(おもと けいいち)

専門 自然人類学・人類遺伝学 理学博士(東京大学)
Ph.D(ミュンヘン大学)
日本学術会議会員
1933年生れ。
東京大学理学部生物学科卒業。
同大学院生物系研究科人類学専攻博士課程中退。
1963年-1964年 フライブルグ大学医学部客員研究員。
1969年-1970年オーストラリア国立大学客員研究員。
1979年東京大学教授。
1993年国際日本文化研究センター教授。
1994年東京大学名誉教授。
主な著書 「現代の生物学」(共著)、「ヒトの発見：分子で探るわれわれのルーツ」、「分子人類学と日本人の起源」

「現代人の起源」

理論生命科学実行委員「遺伝と進化」担当
国際日本文化研究センター教授
尾本 恵市

「現代人の起源」をめぐる国際シンポジウムが、3月21日から3日間、高等研で開かれた。自然人類学者、考古学者、遺伝学者と言語学者ら30人が参加した。「ノア方舟」派と「多地域連続」派がそれぞれの立場から最新の研究成果を発表し、両者間で完全な意見の一致はみられなかったが、ある程度共通の理解が得られた点は有意義であった。

このシンポジウムは、1993年12月に海外の第一線で活躍する学者を招いて高等研で行われた「現代人の起源」についてのシンポジウムを受ける形で開かれた。93年のシンポジウム「The Origin and Past of Modern Humans as Viewed from DNA」では立場の違う研究者の間で意見の一致がみられなかったため、今回はサブタイトルを、「和解に向けて」とした。

人類の起源をおさらいすると、ヒト科はヒトだけと思われていた時代から、遺伝子によって種間の距離が測定できるようになり、ヒト科にはチンパンジーとゴリラも含まれることがわかった。チンパンジーとヒトは約五百万年前にアフリカで分かれ、三、四百年前にオーストラロピテクスになったとされている。そして、原人、旧人から現代人へと直線的に進化したとする考えは、遺伝学的にすでに否定されている。

さらに、87年には今回のシンポにも参加したハワイ大学の遺伝学者、レベッカ・キャンが、ミトコンドリアDNAによって現代人のルーツが探れるとし、さまざまな遺伝子分析の結果、現代人はアフリカで誕生して、その祖先が時代とともに全世界へと広がっていったとする「ノア方舟」説を提唱した。そして、アフリカで誕生した現代人のルーツは「イヴ」と名付けられ、それが世界的な論争を引き起こした。

一方、伝統的な人類学者は、色々な地域で人類は連続的に進化してきたとする「多地域連続」説を唱え続けている。具体的にいうと、ヨーロッパではネアンデルタール人からクロマニヨン人へと進化し、アジアではアジアの原人から新人への進化があったとする説である。

今回のシンポジウムには、「多地域連続」説の大御所である米国のミシガン大学のミルフォード・ウォルポフも参加し、「教会の燭台」説ともいわれる彼の理論を展開した。また、英国のオックスフォード大学の遺伝学者、ロザリン・ハーディングは、血中の α グロビンの遺伝子解析から、アフリカとアジアの両地域に起源があるというウォルポフの説を支持する発表をした。

しかし、他の遺伝学者からは、ひとつの遺伝子では確実な証明にならないとの否定的な意見も出された。

また、米国で研究しているインド人のランジャン・デカは、マイクロサテライトと呼ばれる核内のDNA多型を解析し、「イヴ」説と同じ結論に達している。マイクロサテライトは最近、注目されている遺伝子の特別な領域で、個人差、集団差が大きく、進化の解明に有力な武器となるとみられている。

一方、これまでのミトコンドリアDNAや白血球のHLA型の研究からはアジア人の系統の進化についての新しい見解が述べられた。欧米では、考古学者による石器の形状から現代人の広がり方をさぐる研究も盛んで、形状の類似点から現代人の移動を探る研究ではアフリカ起源説をバックアップするような成果が発表された。

ヨーロッパの化石人類の形態学者からは、ネアンデルタール人から現代人が直線的に進化してきたとは考えにくい点が多数あるとの指摘があった。ミュンヘン大学のスヴァンテ・ペーボ教授はネアンデルタール人の骨からDNAを採取することができれば、現代人との比較がより正確に行え、ネアンデルタール人が進化してクロマニヨン人になったのか、アフリカからきた「イヴ」がクロマニヨン人になったのか、すなわち、「ノア方舟」説と「多地域連続」説の論争に終止符が打てるとした。

集団遺伝学の研究では総合研究大学院大学、高畑尚之教授が「アフリカから人類が広がった最初の人口は約10万人」とし、会場の注目を集めた。

今回は言語学からの成果も発表され、カリフォルニア大学ウイリアム・ワン教授からは日本語と中国語との比較から、日本人の起源を探る研究が発表され、米国の言語学者、メリット・ルーレン博士からも同様の方法によって人類起源をたどり、ミトコンドリアDNAで分類されたのと同じようなクラスター分類ができることが示された。しかし、現代人の言語はせいぜい一万年前までしかたどることができず、現代人のルーツを明らかにするまでには至らない限界性も明確になった。

現代人のルーツを探り当てるには、考古学、人類学と遺伝学、言語学がそれぞれ独立して研究するのではなく、学際的に協力しあっていく必要があると考える。

この国際シンポジウムの成果は、近くシンガポールの出版社World Scientificから刊行される予定である。

✧ 掲 示 板 ✧

✧ ロベール・ミスライ博士を招聘

フランス・パリ第一大学（ソルボンヌ大学）のロベール・ミスライ Robert Misrahi 名誉教授（スピノザ研究者・倫理学者）を5月19日（日）から6月17日（月）まで招聘いたしました。

博士の滞りに併せ、期間中二度にわたり「比較幸福学」の研究集会を開催しました（関係者のみ）。

博士は昨年11月にも比較幸福学の研究のため滞在しており、2回目の招聘となりました。

✧ インターネットホームページを開設

インターネットに高等研のホームページを開設しました。アドレスは

http://www.iias.or.jp/home_j.html（日本語）

<http://www.iias.or.jp/home.html>（英語）

です。研究所の概要や活動を紹介する内容になっていますので、ぜひご覧下さい。

ご意見お待ちしております。

✧ 公開講演会「生命・生物科学の課題 — 21世紀へ向けて」参加者募集

上記テーマで公開講演会を予定しています。入場無料。

○日時 10月5日（土）午後1時～4時30分

○会場 けいはんなプラザメインホール

○講師

岡田節人 生命誌研究館館長（オーガナイザー）

乾 敏郎 京都大学文学部教授

岩槻邦男 立教大学理学部教授

尾本恵市 国際日本文化研究センター教授

埴原和郎 国際高等研究所副所長

宮田 隆 京都大学理学部教授

○申込方法

氏名、年令、住所、電話番号、職業（または学校名）を郵便、FAX、電子メールのいずれかの方法で下記までお送りください（複数申込可）。

〒619-02 京都府相楽郡木津町木津川台9-3

国際高等研究所「生命科学」講演会係

TEL:0774-73-4001 FAX:0774-73-4005

電子メール: lecture@iias.or.jp

定員800名（先着順）

○共催（株）けいはんな、関西文化学術研究都市推進機構

✧ 今後の予定（会場は原則として高等研）

日 時	プロジェクト名/オーガナイザー
7月7日（日）10:00～17:00	「社会情報学」研究会（会場：東京・学士会館分館） 吉田民人（企画委員会副委員長・中央大学文学部教授）
7月12日（金）14:00 ～13日（土）17:00	「情報論的転回」研究会 吉田民人（企画委員会副委員長・中央大学文学部教授）
7月19日（金）14:00～17:00	「生命体の多様性」研究会 岩槻邦男（立教大学理学部教授）
7月25日（木）10:00 ～31日（水）17:00	「複雑系の秩序と構造」ワークショップ 長谷川晃（企画委員会副委員長・大阪大学工学部教授）
8月31日（土）10:00～9月6日（金）17:00	郷原一寿（北海道大学工学部助教授）
7月27日（土）14:00～17:00	「比較幸福学」研究会 中川久定（学術参与特別委員・近畿大学文芸学部教授）
8月6日（火）14:00～17:00	「わざ学」研究会 山口 修（企画委員・大阪大学教授）
8月9日（金）9:00 ～10日（土）17:15	「21世紀医学フォーラム」 埴原和郎（副所長） 武部 啓（京都大学医学部教授）
9月6日（金）14:00 ～7日14:00	「人類の自己家畜化現象と現代文明」研究会 尾本恵市（企画委員・国際日本文化研究センター教授）
9月12日（木）10:00～17:00	「インターカルチャー世界の構造」ワークショップ 大橋良介（学術参与特別委員・京都工芸繊維大学工芸学部教授） 土屋 俊（千葉大学文学部教授）
10月12日（土）12:00 ～13日（日）16:00	<少年少女>サイエンススクール（関西の小学5・6年生対象） 杉田繁治（企画委員会副委員長・国立民族学博物館教授） 葉師寺泰蔵（企画委員会副委員長・慶應義塾大学法学部教授）

✧ IIAS Reports

IIAS Reportsは、ワークショップで発表された内容やその後の研究の展開をタイムリーに報告する論文集です。

これまでに次の4冊が発行されました。

No.	タイトル	プロジェクト名	著者・代表者
1995-001	White Noise Analysis: An Overview and Some Future Directions	数理科学「ゆらぎの解析」	飛田武幸
1995-002	Generalized Functions in Infinite Dimensional Analysis	「ゆらぎの解析」潜在研究の成果 (1995年5～6月)	L. Streit
1995-003	The Structure of the Intercultural World	哲学「インターカルチャー世界の構造」	大橋良介(編)
1996-001	Orders and Structures in Complex Systems	数理科学「複雑系の秩序と構造」	長谷川晃(編)